

令和元年度
お茶の水女子大学論
ロールモデル講演集

リーダーシップ養成の実践のために

「お茶の水女子大学論」は、キャリアデザインプログラムの基幹科目の1つで、主に1年生を対象としています。お茶の水女子大学の特色を知り、自らの将来をイメージしながら学生が在学期間を有意義に過ごすための導入的講座で、4つの要素(※1)から成り立っています。本講座では、学部生がお茶の水女子大学の歴史と現在を学ぶことを通して、本学の教育カリキュラムを自律的に選択し、授業を有効に活用し、社会のさまざまな場面でリーダーシップを発揮する人間として成長することを目指しております。

本冊子は、その一環として行われた、卒業生による

ロールモデル講演(全6回)の内容をまとめたものです。第1回(6/12)は児嶋佐和子氏、第2回(6/19)は三浦亜紀子氏、第3回(6/26)は島田佳子氏、第4回(7/3)は金平佳乃氏、第5回(7/10)は野村浩子氏、第6回(7/17)は鈴木安由子氏にご担当いただき、学生時代の過ごし方や職場での体験・経験などについてお話いただきました。ご講演いただいた皆様にはこの場を借りて改めて御礼申し上げます。また、各回における受講生の感想も一部ではございますが、最終ページにまとめて掲載しております。

グローバルリーダーシップ研究所

(※1)

1. 学長によるオリエンテーション
2. 本学の歴史、社会的役割(過去～現在)を知る
3. 本学卒業生のロールモデルから学ぶ
4. リーダーシップ講演会から学ぶ

目次

児嶋佐和子氏 (スリーエム ジャパン株式会社)	理学部物理学科 卒	2
三浦亜紀子氏 (東日本旅客鉄道株式会社)	理学部数学科 卒 同大学院 修了	4
島田佳子氏 (独立行政法人 国民生活センター)	家政学部家庭経営学科 卒	5
金平佳乃氏 (株式会社ニチレイフーズ)	生活科学部生活環境学科 卒 人間文化研究科ライフサイエンス専攻 修了	7
野村浩子氏 (淑徳大学教授・ジャーナリスト) (元・日経BP社「日経WOMAN」編集長)	文教育学部国文科 卒	9
鈴木安由子氏 (静岡県庁)	文教育学部人文科学科 卒	11
受講生の声		13

お茶の水女子大学論-卒業生ロールモデル (2019.6.12)

児嶋佐和子氏 (スリーエム ジャパン株式会社)

1. 自己紹介

1998年に住友スリーエム(スリーエムジャパン)に入社しました。当時はテープ製品事業部の技術部に所属していましたが、2009年に製品責任部に移り、そして昨年の2018年に部門長となりました。

2. 会社説明

スリーエムの本社はアメリカ・ミネソタにあります。会社名を聞くと、多くの人はポスト・イット®等の文具製品を思い浮かべるのではないのでしょうか。文具などは、B to C (Business to Consumer)と呼ばれる消費者向け製品ですが、B to B (Business to Business)といった工業用の製品も多く製造・販売を行なっています。

現在、スリーエムジャパンでは約2,700名が働いています。私は現在、製造・研究開発を中心に行なっている相模原事業所に勤務しています。

当社は世界約70カ国でビジネスを展開しており、アメリカ本社や海外の社員と電話会議を行ったり、メールのやり取りを行ったりするなど、グローバルな仕事環境となっています。また、アメリカ本社に集まり、ワークショップを行なうこともあります。

このように、スリーエムの製品は、様々な国で製造・輸出・輸入されていますが、そこでツールとして必要となるのが英語です。職場では、アジア圏の人たちも流暢な英語で話しています。入社時は今ほど英語を使うことはなかったのですが、今はグローバルな環境で働くために、否応なしに英語を使う世の中になりました。しかし、一番重要なのは言語力ではなく、自分の意思を日本語でも良いので言葉にする、自分の頭で考えて表現する、自分の意見を言えるようになることだと思います。

ダイバーシティの推進を掲げ、あらゆる多様性を受け入れ、活用していくことで、会社の生産性や競争率が上がると言われています。似たような人が集まって考えるだけでは解決しない問題もあり、多様性を受け入れることが、結

果的に会社のためになると考えられています。しかし、多様な人材が揃ったとしても、その人たちが黙っていても十分にその力を活用しているとは言えません。活発に発言することが、会社の生産性・競争率アップに繋がるのです。皆さんには、ぜひ誰かが発言するまで待つのではなく、自ら発言する、という機会を増やしてほしいと思います。

3. 学生時代について

私は大阪から上京し、大学の大山寮に入りました。当時は4人部屋で、12畳くらいの部屋に2段ベッドが2つ配置され、残りのスペースを4分割したところに机とロッカーを置いたため、とても狭かったのを覚えています。1年の時の部屋は、2年生2人と4年生1人で、学年は異なるもののとても仲が良く、4年生が卒業した時には、皆で卒業旅行として箱根まで行きました。大山寮での生活は、楽しかった思い出が多く、寂しい思いをすることがありませんでした。話し合える仲間は大切な存在ですので、皆さんもぜひ友達を大切にしてほしいと思います。

アルバイトは、野球場、居酒屋、家庭教師、旅行会社のスタッフなどをしていました。外部から見るのと内部に入って知るとは異なることもあるので、皆さんも興味がある職があれば、自分からコンタクトをとり、チャレンジするのも良いかもしれません。



学部3年の夏には友人に誘われ、初めて語学留学をしました。とても楽しい留学生活だったので、帰るのも嫌になるくらいでした。この経験から外資系企業で働きたいと思うようになりました。就職活動は4年生の4月から始めたのですが、なかなか決まりません。そんな中、新聞の求人案内を見つけて、電話をしてみたところ、たまたま欠員が出ているということで、1人で会社訪問することになりました。皆さんには、いろいろな情報を使って積極的に行動してほしいと思います。また、就職の面接では、「大学時代に何をしていたか」という質問がよくされると思いますが、「何に打ち込んでいたのか」と言われた時に、サークルなどではなく、まずは「どのようなことを勉強していたのか」を答えられるよう、勉強をしっかりやってほしいと個人的には思います。

4. キャリアパス

私のキャリアは製品開発から始まり、技術スタッフとして働くようになりました。子供2人の育児をしつつ仕事を続けていた私は、その後、社内公募で製品責任部へと移りました。そして、管理職となり、昨年から部門長として働いています。部門が異なる人も集まって議論する場も多く、様々な意見がある中で一つの指針を見出さなければなりません。その時に役立つのが、クリティカル(ロジカル)シンキングです。いわゆる西洋的な手法ですが、「何を目的にしているのか」「何がゴールなのか」という問いから、「そのために何が必要なのか」ということを把握することができます。正しく問題を捉え、正しいゴールを目指す上で、とても合理的なスキルであり、自分の頭で考える上でもとても役立つ方法です。



5. リーダーとして

担当者としての役割は、部門の目標を達成するために業務を行なうことだと思います。しかし、一担当者であったとしても、自分のプロジェクトのリーダーでもあるという認識は必要だと思います。部門内の他のメンバーだけでなく、他部門のメンバーも率いるリーダーシップが求められます。

部門長になったことで、その役割というのも少し変化しました。部門長としての役割は、会社のビジョンを達成するために、将来的に自分の部門をどのような組織にするのかを考えて実行することだと思います。その中で、部門長として働く上での魅力は、①自分の意志を部門のビジョンに反映できる、②メンバーの意識が変わった、出来ることが増えることへの喜び、だと感じています。

6. お茶大生へのメッセージ

皆さんが社会で働いていく中で、女性としてチャレンジすることの難しさを感じる時もあるかもしれません。確かに女性の場合は出産・育児などで仕事をしたいのにできない時期がありますが、全体を通してみると短い期間です。皆さんには仕事を辞めてしまうというのではなく、周りに協力を仰ぎながらやりたいと思うことを続けてほしいと思います。

また、先日、会社のランチタイムにあった集まりに参加した方々からも、今回の講演にあたってメッセージをいただきました。女性として「自分の能力はここまでと思わない」(“Do not estimate your ability”)、「ミスをしてでも続けていく」(“Make mistakes. Try and error.”)、「周りに助けを求めても良い」(“OK to ask for help.”)というメッセージでした。特に、女性の場合は気後れしがちで、自信がない人が多いようですが、ダイバーシティ推進も行なわれている会社も多いと思うので、ぜひ積極的に挑戦してほしいと思います。

7. 質疑応答

「育児と仕事の両立のために、周りの人からの信頼を得るにはどのようなことをすればいいか」「就職する時にどこで働くのかについて、どれくらい考えたか」「昇進された今、もう一度開発の現場に戻りたいと思うか」などの質問が学生から寄せられました。

私の経歴 (2019.6.19)

1. 私の学生時代

私がお茶大に入学した理由は3つあります。まず、受験生の時に小川洋子さんの『博士の愛した数式』に感動し、その著者と当時お茶大教授であり数学を監修していた藤原正彦先生との対談を読んだことから、本学の数学科を目指すことにしました。つぎに、元々教師になりたいと考えており、お茶大は女子教育に深く関わってきた歴史があったからです。最後に、国立大学への入学を両親からすすめられていた中、出身地である埼玉から東京へ出たいという憧れがあったからでした。そして、2005年に本学の理学部数学科に入学しました。

大学3年生の10月に大学院受験を決めたのですが、そのきっかけは大学3年前期の時に会った「微分幾何学」が面白く、「もう少し研究してみたい」と思ったことでした。そして、2009年に、本学の人間文化創成科学研究科 理学専攻 数学コースに入学しました。大学院時代は、研究がメインで、一人で本を読み進めていくとともに、週に1回先生とのゼミがありました。また、週に1回お茶大附属高校で非常勤講師もしており、教師としての経験も積むことができました。

学生時代を振り返ってみて、まず、良かったこととしては、学業そのものに打ち込んだことです。「学業に対してどれだけ頑張ることができたか、向き合えたか」は、「どれくらい仕事に向き合えるのか」という指標になると思います。また、アルバイトで最低限のビジネスマナーを習得していたため、社会人になるにあたっての障壁が少なかったことも挙げられます。入社して9年目になり、新入社員の教育を担うことも増えてきたのですが、電話やメモの取り方から教える必要がある場合もあり、いろいろと苦労もあります。

その一方で、反省していることとしては、1つは語学力（特に英語）を磨けなかったことです。鉄道会社にも、海外の方が視察等に来ることがあります。意見交換などの機会もありますが、自分の意見を英語で伝えるのは難しいものの、それができると強みになります。また、就職活動時

三浦亜紀子氏（東日本旅客鉄道株式会社）

に、「IT業界に絞らず、様々な業界に視野を広げていれば良かった」とも思いました。就職活動では、自由に話を聞けるチャンスがたくさんありますので、是非いろいろな業界を見てください。もう一つ、学生時代から実践しておけば良かった点としては、怖がらずにいろいろな人に会って、積極的に質問することも挙げられます。



2. 就職活動について

私には教師になるという夢がありましたが、大学院への進学を機に民間企業へ就職することを決意しました。民間企業で働くのであれば、公共性があって社会に影響のある企業で働きたいと考えました。内々定は複数の会社からいただきましたが、「鉄道を、ITを使って世の中をもっと便利にそして楽しくしたい」という思いから、JR東日本（東日本旅客鉄道株式会社）のITフィールドに決めました。

鉄道業界はインフラ業界に属しています。インフラとは、社会や生活の基盤を担当している業界です。つまり、皆さんの「当たり前を支えている」仕事をしています。

JR東日本の鉄道業界における強みとしては、利用者数の多さが挙げられます。年間で約64億人のお客様が利用

しています。1日の利用者数は1750万人、つまり、東京都の人口以上の人を毎日運んでいます。そして、それだけ多くの人を運ぶということは、何かサービスを提供する際に世間に与えるインパクトも大きくなるのではないかと考えたことが、就職先を決める一つの理由となりました。

3. 私の仕事

2011年4月に入社して、まず配属されたのは電気工事部門でした。最初の3年間は信号設備の老朽取替工事の設計・監督を担当しました。特に、工事監督の業務では、夜間に工事に立ち会って施工内容のチェックを行なう業務が大変でした。

4年目にはメーカーに出向して、システム開発を経験し、6年目にはJR東日本でプロジェクトマネージャーのような、システムの切替を取りまとめる役割を担いました。

7年目に入ると、本社で通信ビジネスの企画・運営に携わるようになりました。私は新規案件を担当しており、2017年度には5Gの実証実験、2018年度は新幹線車内コンテンツ配信の実証実験を行なってきました。

4. 最後に

これまでの経験を振り返ってみると、目指していた教師

の道ではなくJRに入社する、結婚して考え方が変わるなど、「人生で達成したいこと」「人生で大切にしたいこと」はその時その時で揺れ動いていました。皆さんには、ぜひ何が大切なのかを考え、その一瞬一瞬で大切なもののために一生懸命行動してほしいと思っています。そして、何かに「一生懸命打ち込んだ経験」を積み重ねていってください。また、時間は有限なので、時には優先順位を考えて、重要でないところは労力を省きつつ、自分のやりたいことをやってほしいと思います。そのためにも、学生時代から、力を入れる・抜くのリズムをつけて行動してみてはどうでしょうか。

「学科で学んできたこと」と「入社した会社で学ぶこと」は必ずしも一致せず、直結しないこともあります。しかし、学問・仕事に関係なく、それに取り組む時の姿勢が大事であり、そういった意味では大学で学んできたことが生かせる場合もあるのではないのでしょうか。

5. 質疑応答

学生からは「資格についてはどのように情報を収集しましたか」、「会社に女性の方があまりいない印象を受けたのですが、どうですか」、「教育関連の仕事ではなく、民間企業に勤めるにあたって、どのような気持ちで決断したか」などの質問がありました。

●「お茶の水女子大学論」ロールモデル講演 3

国民生活センターの仕事（2019.6.26）

島田佳子氏（独立行政法人 国民生活センター）

1. 自己紹介

私は、1986年に家政学部家庭経営学科を卒業して、東京ガス株式会社に入社しました。ちょうど男女雇用機会均等法が施行される少し前くらいの時期です。総合職だったので、都市生活研究所、人事部、ショールーム、営業部、そして情報通信部と様々な部署で経験を積みました。2003年に出産を控えていた私は、当時所属していた情報通信部が残業も多く大変だったこと、また自分の体調などを考えて退職しました。ただし、育児の合間に、経理の仕事などはしていました。

また、自分がしている仕事に応じて、プラスとなる資格も一緒に取得しました。例えば、都市生活研究所に所属していた頃は、消費生活アドバイザーとしての資格を、情報通信部にいた頃は情報処理技術者としての資格を、そして、育児をしていた頃は簿記2級の資格を取りました。

子供が中学校に入学したことで、今までと比べて、自由な時間が増えました。ある時、1日誰ともしやべらない日があったことに危機感を感じて、社会参加をしようと思い、仕事を探すことにしました。子育ての際に、臨床心理の先生などに助けられていたことから、私も人の役に立つ仕

事をしたいと思い、2016年6月から、独立行政法人国民生活センター（東京事務所）で非常勤職員として働くことになりました。現在は、相談情報部の消費者トラブルに関する部署で働いています。

今日は、進路選択や、いつでも誰でも当事者になり得る消費者トラブルへの備え、そして、この3年間の仕事で得た学び・気づいたことについてお話しします。



2. 国民生活センターって、そもそもどんなところ？

国民生活センターは、法律に基づいてつくられた、消費者庁所管の独立行政法人です。独立行政法人通則法や独立行政法人国民生活センター法、消費者基本法（25条に国民生活センターの役割に関する記載あり）といった法律に基づいて成り立っています。国から独立しつつも、消費者庁に監督される立場にあり、お互いに連携しながら行政の一端を担っています。1970年10月に設立され、もうすぐ50周年を迎えるような、歴史のあるセンターです。国や全国の消費生活センターなどと協力しながら、暮らしをよりよくするため、情報の提供や相談業務を行なっています。

3. もしも、消費者トラブルの当事者になったら？

皆さんは消費生活に関するトラブルを相談したい時、何番に電話したらよいかご存じですか。消費者ホットライン188番は、「泣き寝入りはいやや（188）」の語呂合わせで覚えていただければと思います。こちらの番号に電話すると、

ガイダンスが流れ、その指示に従ってプッシュボタンを押していくことで、最寄りの相談窓口に直接つながります。消費生活相談員（国家資格）とそれに準ずる資格・知識・技術を持った相談員が、相談内容の聴き取りをしてお応じします。

消費者庁の消費者白書によると、2018年度における全国の相談電話の年間本数は、101.8万件あり、11年ぶりに100万件を超えることとなりました。架空請求の相談が増加したことが、その原因として考えられます。

4. 仕事を通して学んだこと、気づいたことは？

私は、「消費者トラブルメール箱」担当として仕事をしています。消費者被害の実態をリアルタイムで把握し、消費者被害の防止に役立てることが目的で、2002年4月から国民生活センターのホームページにて運用されています。「メール箱」の利点としては、電話ではなくメールでもらうので、24時間対応できるところにあります。メールフォームによる情報件数は、2017年度は年間約1万件にのぼり、1日30件くらい寄せられています。

メールで寄せられた消費者トラブルの事例はQ&A形式で解説しており、現在約250件が掲載されています。例えば、2016年8月に晴れ着レンタルについての情報提供がありました。現状を把握するためいろいろな情報を集めてみたところ、私の頃の成人式とは異なる点があることに気づきました。そして、約半年かけて成人式の晴れ着レンタルに関するQ&Aを作成し掲載したのですが、その直後に、実際に晴れ着レンタル会社が倒産するニュースが大々的に報じられ、大変驚きました。身近に隠れているからこそリスクとなることを実感し、リスクを知っておくことの重要性を認識しました。また、実際に解説文作成に当たってみて、専門的な内容を皆がわかるように書くことがいかに難しいかを痛感しました。

他にも様々な相談解決の業務に携わりましたが、それらを通じて、メールや相談、各社のホームページなどの客観的な情報を地道に集めることで、問題点が浮かび上がること、普通で当たり前のことは、意外と見過ごされがちであることに気づきました。また、苦情の中にも、業務改善のヒントが隠れていることもあるため、そこから何を読み取るのか、というセンスが問われると考えています。

5. 最後に

国民生活センターの仕事に興味がある人は、ぜひホームページや公式Twitterを見て、進路選択の参考にしてください。また、消費生活に関する問題については、消費者ホットライン「188」まで相談してください。相談を通じて、相談者の個別の問題解決を図ることはもちろんですが、情報収集したものが行政施策に活用されることにもつながります。

最後に、私が仕事を通じて学んだこと・気づいたことをお伝えしたいと思います。まず、考え方次第で、素人であることも強みになります。また、「Win-Win」の関係になる提案をすること、苦情の中に改善のヒントがあると知ることも大事だと思います。客観的な情報収集や普通・当たり前のことが、自分のセンスの良さを磨くことにつながりますので、皆さんが就職してからも役立ててください。

では、お茶大OGの方が作った「デート商法を恋愛ゲームで体験！」という動画を見て終わりにします。

6. 質疑応答

「民間企業と独立行政法人との違いは何か」、「Instagramなどでの広告の取り扱い方について、教えてほしい」、「子育てを終えてから仕事に復帰される際、どのような心情だったか」などの質問がありました。



●「お茶の水女子大学論」ロールモデル講演 4

お茶大論 仕事のこと、子育てのこと ー1人の卒業生のその後ー (2019.7.3)

1. 自己紹介

昔からおいしいものが大好きだった私は、おいしさを追求しつつ人の役に立つことがしたいと思い、大学・会社を選びました。

学生時代は、食物がどのように身体に入って機能していくのかを研究するため、憧れていた本学の大塚恵先生の栄養科学研究室に入りました。学部ではビタミンCに関する研究をして、修士ではビタミンCが白血球の機能に及ぼす影響に関する研究をしました。

ニチレイフーズに入社してから、今年で勤続18年目になります。現在は、夫と小学校1年と3年の息子の4人で暮らしています。今日は、皆さんの進路選択のヒントとなるようなお話ができればと思います。

金平佳乃氏（株式会社ニチレイフーズ）

2. ニチレイフーズと冷凍食品の話

ニチレイフーズはニチレイグループの中の一つで、加工食品を扱っています。「冷力」を事業のコアとして、生活を豊かにしようというのが、私たちの会社の考えです。ニチレイフーズでは、冷凍技術の力を使って、それぞれが独自能力を磨き、信頼されるように働くことが求められます。

商品は、様々な部署・プロセスを経て完成します。企画や開発、開発に伴う研究、新商品のための新たな装置を作るエンジニア、テスト済み商品の生産、販売のための営業など、あらゆる人が協力することで、商品が皆さんに届くようになります。商品開発の場合は、まずコンセプト設定から目標を定め、そこから課題を見つけます。その課題を元に、短期開発と中期・長期開発に分かれて進めていき、

技術開発・品質の確認後、初めて生産することができます。例えば、短期開発では、フライドチキンなどのPB商品開発を、試作・レシピ作りとして数週間、工場への落とし込みで数ヶ月の期間で行うこともあります。

冷凍技術は、食品の時間を止める技術であり、長期間の保存を可能とし、作ったものを、出来立ての様に他の空間でも食べてもらうことができます。冷凍の力を使うことで、①微生物を増やさず、腐敗・発酵を防ぐ、②栄養素の低下を抑制するなどの効果が得られます。

3. 研究開発の仕事

研究開発では、通常2、3人のチーム毎にテーマが割り振られます。私は、1～3年目は家庭用商品の技術開発を担当しており、食品の冷凍耐性付与技術について研究していました。1年目は、卵の冷凍についてひたすら考える日々を過ごしました。細胞の成長の過程からヒントを得て、試行錯誤を重ねた結果、ようやく1年間冷凍保存できるうずらの卵の製法をつくることができました。この手法は特許製法であり、これまで冷凍できなかったものをできるようにした、ということは自分の自信にもつながりました。



4. 子育て

当社では、子育てをしている社員向けの制度として、時短勤務や地域限定総合職制度もあります。給料や昇給のレートは変わりますが、子育てを終了してから転職も可能な総合職に復帰することもできる仕組みとなっています。

しかし、実際に子育てをしてみると、想像以上に大変なことはいろいろあります。例えば、自分の時間が持てないことや、子供がよく熱を出すこと、騒々しいこと、お金がかかることなど、大変なことは尽きません。世の中のお母さんは簡単にこなしていそうですが、それはなかなかできないことです。子育てには、時間・体力・知恵が必要だと思います。将来、皆さんが子育てをする時は、夫・両親や、近所（地域社会）、会社、公的施設・制度、民間のサービス（ネットスーパー、宅配）、お助けグッズ（冷凍食品など）といった周囲のサポートを受けつつ、一人で抱えすぎないようにしてください。

5. 最後に

2017年に、初めての同窓会が開かれ、同級生との17年ぶりの再会を果たしました。結婚している・していない、仕事を続けている・仕事に復帰したなど、それぞれ異なった人生を歩んでいましたが、変わっているところもあるけれども変わっていないと感じることもできました。ずっと働き続けることだけが正解なのではなく、それぞれの人がそれぞれの選択でいろいろな道を歩んでいることを、皆さんにも知っていただきたいと思います。

最後に、皆さんへのメッセージとして、まず健康が一番ですので、健康に気をつけて過ごしてください。また、悩んでいても大丈夫なので、ぜひいろいろなことを楽しんで、チャレンジしてもらえればと思っています。

6. 質疑応答

「子育てをする時に、仕事を辞めることを考えたことはあるか」、「家庭でもおいしく冷凍する方法はあるか」、「テレビで冷凍食品ランキングに出ていた社員の方々の担当は開発か」、「学生時代の経験で役立ったことは何か」、「共働きの上で、夫との協力の際、気をつけていることはあるか」などの質問が寄せられました。

自分らしく、生き生きと働き続けるために (2019.7.10)

野村浩子氏 (淑徳大学教授・ジャーナリスト)

1. 大学卒業からこれまでのキャリア

これまでのキャリアを振り返ってみると、私の場合はエリートコース一筋というよりも、むしろアップダウンのある人生だったように思います。

大学時代は、まず自分のやっていることが将来にどうつながるのか、とまがいていました。また、勉強ではなく、サークル(登山や美術系)活動に熱心な学生でした。このサークル活動を通じて、一生の友人を得ることができましたが、その一方で、勉強しなかったことを今でも後悔しています。「どんな勉強をすれば社会に出て役立つか」という質問をいただくことがありますが、私は今、目の前にある専門分野を、ジャンル問わず一生懸命やるのが重要だと考えています。どのような分野であっても、オリジナルな仮説をどのように検証するのか、を繰り返し行なうため、結果的にロジカル・シンキングや仮説検証サイクルが身に付きます。面接での「大学時代に何を勉強しましたか」という質問に対しては、勉強内容そのものよりも、自分なりにどんな問題意識を持ち、どのように掘り下げていったか、という過程こそが大事です。皆さんには、「これは勉強した」と自分が自信を持って言えるものを見つけていただきたいと思います。

就職にあたって、私は経済的な自立ができるようになると考えました。私の母は「あの時、仕事をやめていなければ」という言葉をよく口にしていたため、自分の人生は自分で舵取りしようと小学生の時から思っていました。しかし、当時は男女雇用機会均等法が施行される前で、一般企業の採用はほとんど男性のみという時代でした。男性と同じように働ける職に就くことができるのは、公務員や教師、メディア、外資系の会社でした。そこで、私は「活字にまつわる仕事がしたい」という思いから、中小ベンチャー企業の編集者になる道を選択し、就職情報会社に入社しました。当初は50人ほどの社員数だったのですが、どんどん規模が拡大していきました。急成長に伴う組織のカオスに居場所を見失ってしまい退職、その2年後に日経ホーム出版社

(現在の日経BP社)に契約社員として入社しました。入社当初は、仕事が全然できませんでした。原稿の執筆では、徹夜で作成した手書きの原稿用紙を「こんな原稿は使えない」と上司にその場で捨てられたこともありました。厳しく指導されつつ、経験を積んでいきました。

雑誌の編集は、まず、切り口のシャープな面白い企画を立てることから始まります。月に1回の企画会議では、皆それぞれが企画を持ち込んで採用するか否かを議論します。この企画を立てるスキルは、大学時代でしたらレポートや課題、文化祭などの場面で求められると思います。将来どのような仕事に就いても必要となるものです。

契約社員として約7年間勤めた後に正社員となり、1995年に「日経ウーマン」編集部の副編集長に就任しました。日経ウーマンの読者層は20・30代の働く女性であり、彼女たちのニーズに応えるための雑誌を作ることが求められます。当時は、働き方改革という言葉すらなかった時のこと。働く女性の多くはON・OFFのバランスをとるのが難しいという悩みを抱えていました。そこで、たとえばON&OFFバランスという企画を立てて、①ON・OFFのタイムマネジメント(自分なりに、という主体性を持つ)②1日から一生までのタイムマネジメント(中・長期の目線を持つ)の2点を提案しました。結果的に、この企画は読者から好評を得ることができました。

ある時、読者インタビュー後、その読者の方から「私は日経ウーマンのおかげで人生が変わった」と感謝されたことがありました。その時、私は何のために仕事をしているのか、ようやくわかったような気がしました。「雑誌の仕事は人を幸せにすることができる良い職業」と感じることができました。

日経ウーマンでの副編集長・編集者としての経験から、私は「人とお金を動かす権限を持って、チームを率いていく＝管理職の役割」と考えています。私が編集長を務めていたときは、今後の方向性を示した上で、皆に企画をあげてもらい、バランスよく配置させ、部下のモチベーションを

上げるように采配していました。方向性を示して、部下がやる気になることで良い雑誌ができるとすれば、部下に任せることも必要になります。結果的に、部数も伸びますし、広告も入り、利益を上げることにつながります。中・長期的にはブランド価値を上げることも重要です。短期の利益確保、中長期のブランド価値向上、この両方のアプローチから、部数を伸ばすことにも成功しました。

40代後半で日本経済新聞に編集委員として出向した時には、記者の仕事もしました。雑誌と新聞は同じメディアでありながらも、目的が少し違いました。雑誌の時は、「一人ひとりを幸せにすること」でしたが、新聞では「中立公正な情報を届けて、人・組織・社会をより良い方向に導くこと」を目指します。

振り返ると山あり谷ありのキャリアでした。皆さんも社会に出たら、自分がどういう時にハッピーになる、あるいは落ち込んだかを見つめる時間をもつといいと思います。落ち込んだ時、ピンチをどうやって切り抜けてチャンスにするかが重要です。ピンチこそ、自分が成長するチャンスでもあります。

2. チャンスをつかむ5つのポイント

～自分らしいキャリアデザインを実現するために～

キャリアデザインは人それぞれですが、生涯一社の時代は終わり、モデルのいない時代を迎えました。私は「日経ウーマン」の副編集者時代に、ウーマン・オブ・ザ・イヤー（その年、最も活躍した女性を選ぶ賞）を始めました。この賞のきっかけとなったのは、読者の方との会話でした。40歳の頃、20代後半の読者から「その年齢まで、会社員で生き生きと仕事をしている人に初めて会った」と言われました。この言葉がきっかけとなり、ロールモデルとなるような人を読者にもっともっと紹介したい、と企画しました。最初は「意識高い系の企画だから売れない」と役員から反対されたのですが、私は「これはブランド価値が高められる企画であり、自社がやるべき企画だ」と粘り強く説得しました。数年経ち、外部の人から良い評価を得ることができたため、この企画は価値あるもの・意義深いものとして社内でも認められることとなります。

私は、時代の流れの中でこの人・このテーマはどのような意義があるのか「意義付け」することも、編集者の役割だと考えています。受賞者一人ひとりに対して時代の流れ

を見極めながら意義付けをしているのが、この賞です。

受賞者から学べるチャンスをつかむポイントはいくつかあります。まず、①偶然の出来事をチャンスにつなげる行動力があることです。キャリア形成において、「棚ぼた」はありません。行動を起こすからこそ、チャンスが巡ってくるのです。次に、②主体的な柔軟性があることです。そして、最後に③自己投資をして、自分を磨くことが大切です。

「日経WOMAN」で、約1600人の働く女性を対象に、「ハッピーキャリア組」の共通項を探ったことがあります。ポイントは、サクセスではなくハッピーを基準にしたこと。そうすると、ハッピー組に共通する意識や行動パターンが浮かんできました。学歴や肩書きなど履歴書に書けるようなものとは関係なく、「柔軟性」と「能動性」が大切だということが分かりました。柔軟かつ能動であるクリエイティブ型の人が一番ハッピーである割合が高く、この法則は就職活動や社会人になっても当てはまると考えられます。



3. 質疑応答

「記事・文章を書く上で、気をつけていた点や役に立ったことはあるか」、「ON・OFFの切り換えで大事にしていることは何か」、「ピンチをチャンスに変える時は、どのような意識で行えば良いか」、「インタビューでデリケートな質問をする時に気をつけていることは何か」などの質問が寄せられました。

この10年を振り返って ～地方公務員の仕事と、大学生の皆さんに伝えたい3つのこと～ (2019.7.17)

鈴木安由子氏（静岡県庁）

1. お茶大時代を振り返って

10年前、文教育学部人文科学科に入学した当初の私は、自分が何に向いているのかよく分からず、具体的に研究したいテーマも持っていない、酷く宙ぶらりんな状態でした。その不安から脱却すべく、学業・サークル活動・アルバイトそれぞれにおいて、手当たり次第、幅広い分野に飛び込んでいったというのが実情ですが、その結果、自分に合った進路を絞り込むことができ、同時に学生時代にしか経験し得ない貴重な経験を多く積むことも叶いました。

まず、学業においては、とりあえず教職課程を履修していたこともあり、半自動的に幅広い分野の講義や演習に参加し得ていました。また、人文科学科では、1年次末にコース選択の機会があります。私は、「地理学コース」に進みました。「地理的な視点」さえあればどんなテーマでも受け入れてくれ、学問の縦割りにもとらわれない地理学という分野に、研究対象への眼差しの優しさも含めて、懐の深さを感じたからです。加えて、数学があまり得意ではないものの、どこか理系というものへの憧れがあった私にとって、地理学は、文系と理系との境が融合している学問であり、その点にも惹かれました。

地理学に興味を持った具体的なきっかけは、1年生のときに参加した「巡検」でした。巡検では、ある特定のテーマに沿って、その分野に詳しい人の指導のもと、丸一日かけてある地域を自分の足で歩きます。見慣れている景色、あるいは初めて行く場所でも、地形の意味やその場所の歴史を教えてもらいながら歩くと、どこにでもあるような風景が今までと全く違って見えてきます。とても刺激的な体験ができるので、ぜひ多くの学科の皆さんに体験してみしてほしいフィールドワークです。

次に、サークル活動では、剣道部に入部しました。大学からふと始めた剣道でしたが、二段を取得し、主務も務めるなど、それまで全く知らなかった世界を知ることができました。体育会系に対して否定的に思う方もいるかもしれませんが、目上の方への礼儀など、社会人として生きる上で大切なことを学ぶことができる場だと思います。ほかにも、

大会準備にあたっての他大学との調整や、SNSを使った部の広報など、勉強になることが多くありました。

アルバイトは、デパ地下の売り子や居酒屋、テレアポ、通販会社の事務など、多種多様なものに挑戦しました。1年生の春休みに、データ入力の短期アルバイトで稼いだバイト代で、ペルーに旅行したのは今でも良い思い出です。

大学生活はあっという間に過ぎていき、2年生の後期になると、進路について考えなければならなくなりました。いろいろなアルバイト経験から気付いた「面接や営業が苦手、事務仕事は比較的好き」という自分の特性や、民間と公務員の特徴の比較などから、筆記試験の比重が高い公務員を目標に決めました。

2年生の冬から公務員予備校を探し、3年生の4月から実際に通い始めました。独学や通信教育という選択肢もありましたが、予備校で得られた情報は多かったのも、個人的には通学で良かったと思っています。なお、公務員試験の筆記問題は、基本的に過去問から作成されているので、とにかく過去問を何回も解くことが効果的な勉強法の一つだと思います。

さらに、公務員という仕事への理解を深めるため、国や地方自治体の採用説明会に参加したり、3年生の夏休みには文部科学省のインターンシップに2週間通ったりもしました。最終的に内々定をいただいた中で、幅広い業務を経験でき、実家から通勤できる静岡県庁に入庁しました。



2. 地方公務員の仕事

静岡県の場合、入庁直後は「教育異動期間」として、2年毎に異動がありました。このため、入庁後の7年間で、全く異なる4つの分野・地域を経験することができました。

最初の2年間は、実家からほど近い出先機関で、会計・総務事務を担当しました。書類仕事の日々でしたが、県の職員として必要不可欠な事務能力を磨くことができました。

次の2年間は、本庁のシステム管理部門に配属となり、ネットワーク管理やサイバーセキュリティ対策を担当しました。着任早々、日本年金機構における不正アクセスによる情報流出事案が発覚した影響で、技術面での対策強化や職員のセキュリティ意識啓発などに奔走する2年間となりました。ちなみに、「情報セキュリティマネジメント試験」は、文系でも知っておくべきセキュリティ知識を手軽に学べる資格ということで、大学生の皆さんにもおすすめです。

3ヶ所目の異動では、浜松の実家を遠く離れ、伊豆半島の先端にある下田の農林事務所に赴任することとなりました。主に、農道を作ったり広げたりする際に必要な土地を、地権者のお宅を回って売っていただく「用地買収」という仕事を担当していました。営業に近い仕事内容のため、最初は少し不安でしたが、町役場や地元の方々のご協力のおかげで、何とか事業を進展させていくことができました。

用地買収の仕事を経験してよかったと思うのは、この世に存在するどのような人工物でも、多くの人が関わって、苦労して作ったものだ実感することができたことです。たとえば、道路一つ作るのにも、事業計画をまとめたり委託・工事契約を発注したりする自治体職員、専門的な設計や補償額算定を担うコンサルタント、道路建設のために生活の拠点を移転せざるを得ない方、炎天下で工事する工事業者、工事の騒音に悩まされるご近所の方、完成後も維持管理を行う役場の担当者などが関わっています。大学生の時の巡検では見えていなかった視界が、体感を伴って開けたと思います。

現在は、内閣官房の東京オリンピック競技大会・東京パ

ラリンピック競技大会推進本部事務局に出向し、来年の夏に開催される2020年東京大会の準備に携わっています。

2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の主体となっているのは、あくまで開催都市である東京都と大会組織委員会です。私たちは、国として開催を保証・協力・支援するという立場であり、各府省庁の取りまとめや国会对応、合意形成のための会議の運営といった役割を担っています。大会1年前を目前に控え、セキュリティ・暑さ・感染症・輸送対策のほか、「beyond2020」や「ホストタウン」の全国展開、共生社会・持続可能な社会の実現に向けた取組などに、関係者一丸となって全力を尽くしています。

以上のように、地方公務員の仕事は、非常に幅広い業務内容があることが魅力の一つです。一方で、自分の適性を見つけて、専門分野を極めることもできます。育児支援も充実してきており、女性にとって働きやすい職場でもありますので、興味を持った方はぜひ志望してください。

3. 大学生の皆さんに伝えたいこと

最後に、皆さんに伝えたいことが3点あります。

1つ目として、必要単位以外の講義を積極的に履修してみしてほしい、ということです。幅広い分野の知識に触れることで、自分の世界・視野が広がることはもちろんですが、そうして初めて出会った分野の中から、他の人に絶対負けないものや、時間を忘れて打ち込めるものに巡り会えるかもしれません。社会人になると、勉強の時間はなかなか取れなくなってしまいます。貴重な学生時代だからこそ、たくさんの講義を詰め込んでみてください。

2つ目は、とにかく旅行に行ってみてほしいということです。「可愛い子には旅をさせよ」ということわざもありますが、見聞を広め、知識を増やすという点で、やはり実際にその場所に行くことでしかイメージが広がらない部分というのは大いにあると思います。それは、初対面の方との話題の共通項を増やしたり、自分の想像が及ばない部分を少なくしたりすることにもつながっていくのではないのでしょうか。



3つ目に、ぜひいろいろなアルバイトを経験してください。幅広い仕事を体験できるのは学生時代の特権です。どちらかと言えば社会的に弱い立場であるアルバイトの視点から、世間の見え方を知ることができることも利点の一つです。また、お金も稼げるので、東京でしかできない文化的な体験をする原資にするのも良いと思います。

最後に、私が10年前にお茶の水女子大学論で提出したレポートに書いてあった言葉をいくつかご紹介したいと思います。「とりあえず経験することから何かが始まる」「今しかできない体験に投資する」「失敗しても何とかなる」など、何人かの先輩方の体験談を伺い、共通して感じ取ったことだったように記憶しています。私自身はそこまで大きな挑戦はしてこなかったと思いますが、大学生の皆さんに何か

を伝えたいと考えたとき、「とりあえず経験してみて！」という言葉が真っ先に浮かびました。たとえば、オリンピックやパラリンピックに、あまり興味が湧かないと思う人もいるかもしれませんが、そこであえて自分から触れに行ってみて、何が起こるか、現実には何も起きなくても、自分の中で何か変わるかを、楽しんでみてほしいと思います。

4. 質疑応答

「東京と静岡のどちらで就職するかを決めたのはいつごろでしたか」「公務員と民間企業、どちらにするかを決めるにあたって、できることややるべきことはありますか」などの質問が寄せられました。

受講生の声（一部抜粋）

自分の専門分野がどうかではなく、どれほどそれに対して深く掘り下げられたか、どのように自分なりの結論を導いたかという「過程」を大切に、これからの4年の勉強を大切にしたいと思います。

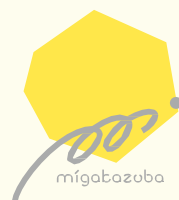
あまり将来のビジョンがはっきりしていないからこそ、先輩方のロールモデル講演を聞かせていただくことで、卒業後の道にはこういうものがあるのか、と知ることができて参考になりました。

お仕事との向き合い方、仕事に大切なこと、キャリアに関することから、家でのスケジュール、家族との関わりなどを話していただき、自分がどう生きるか考える機会になりました。

グローバル化に伴って、英語は必要だということを改めて認識したが、それ以上にまずは日本語で自分の考えを説明することが大切だと分かりました。

将来に役に立つか、立たないかで取り組むものを決めるのではなく、幅広く挑戦していきたいと思います。

子育ての実態と実感を聞いたのも、貴重な体験でした。



令和元年度 お茶の水女子大学論
ロールモデル講演集

発行日 令和元年12月4日

発 行 国立大学法人お茶の水女子大学
グローバルリーダーシップ研究所
〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1
E-MAIL: info-leader@cc.ocha.ac.jp
TEL: 03-5978-5520
<http://www.cf.ocha.ac.jp/igl/>

編集責任 グローバルリーダーシップ研究所 特任講師 大木直子

編集協力 グローバルリーダーシップ研究所 アカデミック・アシスタント 大持ほのか

文部科学省特別経費(国立大学機能強化分)

「グローバル女性リーダー育成カリキュラムに基づく教育実践と
新たな女性リーダーシップ論の発信」